

サイエンスパートナーシッププログラム(SPP)事業の実践

Practice of Science Partnership Program (SPP)

内記 昭彦[1]; 山崎 晴雄[2]; 鈴木 毅彦[3]; 植木 岳雪[4]

Akihiko Naiki[1]; Haruo Yamazaki[2]; Takehiko Suzuki[3]; Takeyuki Ueki[4]

[1] 都立成瀬高; [2] 都立大・理・地理; [3] 首都大・都市環境; [4] 産総研・地質情報

[1] Naruse High School; [2] Dep. Geography, Tokyo Metropolitan Univ.; [3] Dept. of Geography, Tokyo Metropolitan Univ.; [4] GSJ/AIST

<http://www.asahi-net.or.jp/~gc7a-nik/>

SPP 事業は、文部科学省による科学技術・理科、数学教育を充実させることを目的とした「科学技術・理科大好きプラン」の中の重点的施策として2002年から実施されている。中学校・高等学校等と、大学・公的研究機関・民間企業等との連携により先進的な科学技術・理科、数学教育等を実施するもので、「研究者招へい講座」「教育連携講座」「教員研修」が設定されている。

本校では2003年と2004年に、東京都立大学大学院理学研究科、及び産業技術総合研究所地球科学情報研究部門の協力を得て「研究者招へい講座」を実施した。本事業の実践を通じて、地球惑星科学系の大学・研究機関が持つ人的・物的な資源を、地学教育にどのように生かしていくことが可能か、また、どのような成果が得られたかについて検討した。

本校では、2003年「郷土の生い立ちを探る -相模野の地形と地質-」、2004年「郷土の生い立ちを探る -相模野と箱根火山-」をテーマとし、いずれも地殻変動・火山・地震・地球規模での環境変遷や災害の実態などの内容について、野外巡検を中心とし、室内実験及び実習・講義の他、まとめの生徒発表を行った。生徒達は、大学教官及び研究機関研究者と大学院生を含むスタッフの指導を受け、最新の知見に基づいた発展的な学習を行ったことで、地球惑星科学への興味・関心・理解を高めることができた。

地球惑星科学の分野においては、実際の自然の姿を観察・体験することが、教室では得難い実物の大きさや、時間・空間的スケールをも認識し、よりグローバルな視点を持たせられることが確認できた。

このように、SPP 事業は、学校側にとっては研究者との接点を持てたこと自体が普段の授業では得難い貴重な経験となった。生徒の反応からも、専門家の指導を受けたからこそ得られた、高いレベルでの探究活動への満足感と理解がうかがえた。また、大学・研究機関側にとっては行政改革・大学改革の大きな変革の中で、第一線の研究者による最新の研究成果を学校教育の場に広くフィードバックすることで、公開講座やオープンラボと同様に社会的貢献を果たせるというメリットがあった。このように、学校と大学・研究機関双方に非常に有益であった。

SPP 事業は、地球惑星科学の理解と推進の上でも時機を得たもので、今後も継続的に実施されてこそ意義がある。地球惑星科学はもとより、日本の科学技術の発展のために、学校側も大学・研究機関側も積極的に取り組んでいくことが必要である。また、学校側と大学・研究機関側の双方がエントリーしやすくなるように、例えば、本合同大会が相互のパートナー探しの場となるような体制作りが望まれる。